

# 先史時代における東九州と西南四国との交流

橋 昌 信

## はじめに

東九州の大分県は九州の北東部に位置し、北西部は山国川および犬ヶ岳・英彦山によって福岡県と境をなし、南西は阿蘇山の外輪山と接しており、南は祖母・傾山系によって大きく遮られている。これらに対して、東は豊予海峡・豊後水道を介して四国西南部と向かい合っており、さらに北東は周防灘を挟んで中国地方の山口県と対峙し、瀬戸内海地域の西部を形成している。

東九州と西南四国との地理的な関係は、愛媛県西宇和郡の佐多岬と北海部郡の佐賀関とは僅か15キロで、しかもその間には高島が所在している。また、南海部郡上浦町と宇和島市の南方に位置する藤原純友ゆかりの地として知られる日振島までは30キロ弱であり、さらに南海部郡鶴見町と北宇和郡由良岬との間は30数キロで、その丁度中間に水ノ子島が位置している。

このように、東九州と四国西南部は距離的に極めて隣接した位置関係にあり、その途中の島々を考慮すれば、両者の距離はさらに狭まることになる。空気が澄んだ晴れた日には、別府からでも佐多岬を始め四国の島影を望むことができるのである。先史時代から今日にいたるまで、いろいろな形で東九州と四国西南部との交流が認められるのは、地理的に見てもむしろ当然のことと言えよう。

そこで先史時代における東九州地域（大分県）と瀬戸内海西部地域、特に西南四国（愛媛県西部・高知県西南部）との交流について考えてみる。

## 1. 旧石器時代の交流

約3万年前から1万数千年前の後期旧石器時代について、両者の関連を積極的に物語る資料は現在のところ限られているが、交流は当然有ったものと考えられる。特に最終氷期（ヴェルムIV）の最寒冷期である約2万年前の前後の時期は、凡世界的規模の海退現象が起り、現在の海面より-130~150mの低下が考えられている。それによって瀬戸内海一帯が陸化し、その

大半の地域は盆地・平野などの草原地帯が広がり、豊予海峡（速吸瀬戸）から豊後水道かけて「古豊予川」が南流するという、現在とは全く異なる景観が、東九州と四国西南部の間に展開していたものと想定されている。

実際、その当時の草原に生息していたと考えられるナウマン象・オオツノジカなどの臼歯や骨が、漁師の網にかかって発見されるのである。特に今治と広島の間芸予諸島周辺、西国東郡の姫島の沖合、佐賀関と佐田岬の中間の地域などで顕著である。このような現在の海底のほかにも、大分県犬飼町でオオツノジカの下顎骨が、また大野郡大野町ではナウマン象の牙やその他の骨が発掘調査で発見されている。

この2万年前後の時期に西南四国と東九州が陸続きで、しかもその中間に開けた草原に生息する大形哺乳類を狩猟の対象とした旧石器時代の人々の交流は当然考えられてよいであろう。そこで、四国西南部と東九州の旧石器文化の様相について見ることにする。

これまでのところ旧石器時代の遺跡が多く発見され、発掘調査など機会が多い、東九州地域を先にふれることにする。

#### 東九州地域

東九州の大分県内で、これまで約180箇所の遺跡が表面採集や発掘調査などで確認されている。これらの遺跡の半数ほどは、大野川中流域に集中的に認められ、次に玖珠・日田地域の筑後川上流域に比較的集中しており、その他の地域では大分川の下流域や宇佐平野などで少数発見されている。ところが、西南四国地域に対峙する東国東郡や北海部郡・南海部郡などの地域では、今のところ皆無に近い状況で、豊予海峡・豊後水道沿岸地域は旧石器時代の遺跡に恵まれていないのである。

ナイフ形石器文化 大野川中流域の直入郡清川村岩戸遺跡、大野郡大野町駒方遺跡、同郡三重町百枝遺跡などでは、これまでの発掘調査によって、ヴェルム氷期最寒冷期前後の時期の後期旧石器文化の石器群の様相が、ある程度明らかにされている。この時期はナイフ形石器に代表される旧石器文化が発展した時期で、各種の剥片剥離技術による縦長剥片や横長剥片などを素材に、二側縁加工や一側縁加工、基部加工のナイフ形石器がもっぱら製作使用されている。

このナイフ形石器文化は、最寒冷期よりおよそ千数百年前のA T（始良T

n火山灰)が降下堆積した時期(約21000~22000年前)をほぼ境にして、石器組成などの面に違いが認められる。すなわちA T降灰の以後のナイフ形石器文化の石器組成には、新たに剥片尖頭器や三稜尖頭器(角錐状石器)などの石器が登場するのである。ナイフ形石器以上に刺突の機能が強化された形態を保持した槍先形尖頭器の出現である。

剥片尖頭器は九州地域と本州西部に主要な分布域が認められるが、現在のまでのところ四国地方での発見例を知らない。その出自については必ずしも明瞭でないが、韓国においても存在しており、韓半島から西日本もたらされた可能性が考えられている。これに対して、三稜尖頭器(角錐状石器)は九州から関東・東北までの広い地域に普遍的に存在する石器であり、東九州地域と西南四国地域との交流を考える上での資料の一つとなろう。

これらの石器の出現と相前後した時期、東九州を含む九州のほぼ北半分の地域、すなわち、大分・宮崎の北部・福岡・佐賀・熊本にかけて、瀬戸内地域を中心に発達した剥片剥離技術である、瀬戸内技法と国府型ナイフ形石器が見られる。サヌカイトの石材を用いた、翼状の規格化した横長剥片を剥離する技術とその剥片を素材にした一側縁加工のナイフ形石器は、瀬戸内海を介して九州北部に波及したものである。東九州の地域で散発的に発見されているこれらの技術とナイフ形石器も当然瀬戸内地域の影響によるもので、先の三稜尖頭器と同様に、そのルートについては北九州地域からと西南四国地域からとの二つが考えられる。

細石器文化 およそ14000~15000年前、ナイフ形石器を主体にした文化は、細石刃とその素材である細石核で特徴づけられる細石器文化に交代するのである。この新しい細石器文化は、九州から北海道までの日本列島の全域にとどまらず、東北アジアの広範な地域に展開している。

大分県内では大野川中流域の大野町宮地前遺跡、三重町上下田遺跡、犬飼町の松山遺跡・市ノ久保遺跡や玖珠・日田地域の天瀬町宇土遺跡・平草遺跡などを始めとして50箇所を上回る遺跡で、細石刃や細石核などが発見されている。細石器文化での時間的位置付けや地域性を如実に表すものと考えられる細石核は、その形態的・技術的特徴から型式分類が行われている。その大別に従うと、東九州の大野川流域では「船野型細石核」が卓越しており、一方、玖珠・日田地域では「野岳型細石核」が主体を占めている。東九州地域

ではこの他、数は少ないが楔形をした「福井型細石核」も認められる。

これら東九州の地域も含めて、九州の細石器文化出現の背景については、明らかになっていない。しかしながら、ナイフ形石器とは異なる「組合せ石器」という新しい細石器文化が、九州内で自生したとは考え難いので、他地域からもたらされたものと考えられ、いずれかの地域となんらかの交流が存在したことになる。

石材 東九州地域でのナイフ形石器文化および細石器文化での剥片石器の石材は、大野川流域では無班晶流紋岩あるいはホルンフェルスの使用が一般的である。大分県下で後期旧石器時代の遺跡が最も集中する中流域では、剥片石器の90%以上を占めている。他にチャート・圭質岩・安山岩などがごく少量使用されている。大野川流域での石器群の石材を象徴するこの無班晶流紋岩あるいはホルンフェルスは、大分県と宮崎県との県境の祖母・傾山系の火山岩類で、大野川の上流域から中流域にかけての河床に転礫として存在していたものと考えられる。

一方、県西北部の玖珠・日田地域も旧石器時代遺跡が比較的集中する地域であるが、ここではチャートや黒色の黒曜石が主体に用いられている。黒曜石の中には佐賀県の腰岳産と考えられるものが含まれており、石材で西九州との交流が認められる。

姫島産黒曜石は縄文時代に東九州地域を中心に多用されているが、後期旧石器時代ではほとんど用いられてない。

#### 西南四国地域

当地域で確認されている旧石器時代遺跡として、愛媛県内では南宇和郡御荘町和口遺跡・同町深泥遺跡、津島町池の丘遺跡・影平遺跡、一本松町大駄場遺跡、高知県西南部の宿毛市宇須々木遺跡、四万十下流域の中村市双海中駄場遺跡・双海本駄場遺跡など知られているが、その遺跡数は以外と少なく、10箇所を大きく上回ってはいないようである。西南四国地域でも特に西宇和郡などの海岸部およびその周辺地域においては発見されていない。

東九州の大分県側でも海岸部はやはり少なく、別府湾周辺に20箇所近く認められるが、豊後水道に面した北海部郡・南海部郡などのリアス式海岸部およびその周辺は皆無の状況である。

これは先に述べた20000年前の前後をピークとする海退現象による地形の

変化に起因するものと考えられ、現在の海岸近くの海底に後期旧石器時代の遺跡が立地していたものと予想される。

ナイフ形石器文化 御荘町和口遺跡では国府型ナイフ形石器や翼状剥片などが採集され、1989年、和口遺跡調査団での試掘調査で剥片・石核が発見されている。また、同町深泥遺跡でも国府型ナイフ形石器が採集されている。これら国府型ナイフ形石器や翼状剥片などの瀬戸内系石器群の発見は、南宇和郡の地域に瀬戸内系の旧石器文化の波及・影響を示唆している。これら瀬戸内系文化が南宇和郡からさらに東九州地域へと波及した可能性を論じるには、西南四国地域の資料の不足もさることながら、東九州地域、特に豊後水道に面した北海部郡・南海部郡などでの旧石器時代遺跡が発見されてなく、全く不明である。ただ、東九州地域への瀬戸内系石器文化の波及のルートとして、地理的には北九州地域からと、この西南四国地域の両者を考えなくてはならないであろう。

1991年・1992年に別府大学で試掘調査が実施された津島町池の丘・影平の両遺跡では、スクレイパー・使用痕剥片・剥片など後期旧石器時代の石器類が発見されている。ナイフ形石器のような明確なタイプツウルがなく、また、瀬戸内系の石器群の存在を示す資料も見られず、後期旧石器時代での編年的な位置づけを積極的に語ることはできない。しかしながら、両遺跡の石器群の中に、少数ではあるがこれまでの経験的な観察による限り、大野川中流域で普遍的な無班晶流紋岩あるいはホルンフェルスと極めて類似したものが認められることは注目される。もっとも、当地域で獲得が可能な剥片石器の素材に成りうる石材、すなわち在地系石材についての究明が十分行われていない今日、東九州地域の石材との対比は慎重に行うべきであるが、石器類の比較検討と共に、石材の交流の面からのアプローチも積極的に行われる必要がある。香川県金山産のサヌカイトの西南四国地域での利用の実態についても同様であろう。

細石器文化 愛媛県の細石器文化の遺跡はさらに少なく、今次市沖合の広島県との境の芸予諸島など、県内で4～5箇所が知られているが、それらはいずれも中部瀬戸内と内陸部に限られている。高知県側でも細石器文化の遺跡は数箇所、しかも県内の中部・西部に位置している。このように西南四国地域ではこれまでのところ明確な細石器文化の遺跡は発見されていないので

ある。全国的にみても、四国西部から四国の太平洋側にかけての地域は、細石器文化の遺跡の分布が極めて希薄な地域と見なされている。

ただ、これまで愛媛県内で発見されている細石器の中には、東九州に顕著な船野型細石器が認められており、今後西南四国地域からも同様な細石器が発見される可能性は十分に期待され、東九州地域の細石器文化との比較検討や両地域の交流についても将来論議されることになろう。

## 2. 縄文時代の交流

地質学の時期区分で、氷河期の更新世から後氷期の完新世に移行する時期は約12000～11000年前が推測されており、その頃に始まる縄文時代の自然環境は、今日とほぼ同じと考えられている。しかしながら一気に変化したわけではなく、1万年前ころは現在よりも-40m前後の海退現象が見られ、瀬戸内海で水深の浅い伊予灘～芸予諸島周辺は湿地や草原地帯がまだ広がっていたものと思われる。東九州と西南四国との豊後水道は、水深が100m前後あるので、すでに陸続きではなかった。

海で隔絶されてから両地域の交流について、時期ごとに主として縄文土器のあり方からまず見ることにする。

創草期・早期初頭の遺跡として、西南四国地域では東宇和郡穴神洞遺跡・中津川洞遺跡がある。穴神洞の第5層から無文土器と正三角形の石鏃が出土している。また、中津川洞の第4文化層から無文土器と篋状原体による押圧沈線状文の土器、石鏃・楔形石器などが発見されている。これらの無文土器は層位的に微隆起線文土器や平底の押圧文系土器よりも新しく、また押型文土器よりも古い時期が考えら、愛媛県上浮穴郡上黒岩岩陰遺跡の第6層出土の無文土器に対比される。上黒岩岩陰遺跡のC<sup>1</sup>による測定年代では、10085±320の値が出されている。

上黒岩岩陰遺跡の最下層の細隆起線文土器文化層からは、四国・中国・近畿地方からさらに東日本地域に広く認められる有舌尖頭器が出土している。しかしながら、穴神洞遺跡の最下層の微隆起線文土器には有舌尖頭器が見られず、また中津川洞遺跡の無文土器に先行する文化層からも有舌尖頭器は発見されてないのである。比較的近接する四国地方にあって、しかも出土遺物や層序からほぼ同じ時期と考えられながら、両遺跡は石器の面では上黒岩岩

影遺跡とは異なった様相を示しているのである。

一方、東九州地域の玖珠郡九重町二日市洞穴は、穴神洞遺跡・中津川洞遺跡との対比が可能な遺跡と考えられるものである。この洞穴では押型文土器文化層の下位に、無文土器・条痕文土器を主体とした文化層が5枚層位的に確認され、それらの土器は尖底から丸底、さらに平底へと言う器形の変遷が認められる。特に第8文化層の無文土器には石鏃・槍先形尖頭器と共に楔形石器が出土しており、中津川洞の第4文化層出土の楔形石器との関係が問題とされよう。なお、二日市洞穴の第8文化層は熱ルミネッセンス法による年代測定で、10480年前と10670年前という値が出ている。

また、東国東郡国東町の成仏岩陰遺跡でも押型文土器に先行する平底ぎみの丸底をした無文土器の存在が層位的に明らかにされており、C<sup>14</sup>年代測定法によって、9780±190年前と10240±200年前の数値が出ている。穴神洞・中津川洞遺跡の無文土器と極めて近接した時期が考えられる。

無文土器は縄文時代では極めて普遍的な土器で、無文土器の有無のみを取り上げて両者の交流を語ることは出来なく、また、細部にわたっては異なる特徴が存在するようである。しかしながら、押型文土器が盛行する以前の1万年前の前後の時期に、無文土器を主体とする文化が、西南四国と東九州の両地域に存在していたことは事実として認められる。その両者との交流については今後の問題とされるが、共伴する石器から見ると上黒岩岩陰遺跡は本州的な色彩が強く、それに対して西南四国地域の穴神洞・中津川洞の両遺跡は、より東九州地域的な様相が窺えそうである。

早期中葉～後半にかけては、西日本一帯に押型文土器群が盛行する時期であり、西南四国地域でも先に触れた穴神洞・中津川洞遺跡の他に、津島町池の丘遺跡・御荘町深泥遺跡・一本松町茶堂遺跡などの遺跡が知られている。

東九州地域においても速見郡早水台遺跡・杵築市稲荷山遺跡を始めとして、別府市十文字原第一遺跡・大分市庄ノ原遺跡など別府湾周辺地域や南部の臼杵市小六洞遺跡など海岸部から、さらに熊本との県境に近い直入郡荻町政所馬渡遺跡・寺の前遺跡・下菅生B遺跡など、内陸部まで数多くの押型文土器文化の遺跡が認められる。

結局、この時期は西南四国地域・東九州地域共に西日本一帯の押型文土器文化圏の一部を構成しており、豊後水道を挟んで対峙する両地域の交流は当

然考えられることである。

早期末頃、鹿児島県を主体にして九州ほぼ全域に分布する土器で、朝顔状に開いた口縁部に特徴が認められる塞ノ神式土器がある。東九州地域の大大分県でも30箇所近い数の遺跡が知られているが、さらに東の地域への広がりには空白であった。

ところが、1990年試掘調査が行われた津島町池の丘遺跡において、僅か1点であるが塞ノ神式土器が発見され、九州地方以外の地域での初めての例である。早期中葉と前期における東九州地域と西南四国地域の交流については、同様な土器の存在から考えられたが、その中間の時期については不明であった。しかしながら池の丘遺跡の塞ノ神式土器が発見されたことから、早期末～前期初頭の時期での交流の糸口が示されたことになる。

前期における東九州地域の主要な土器としては、内外面に貝殻条痕を施し、その上に粘土の隆帯を張り付けた轟式土器（轟B式土器）が存在する。この土器は九州の全域に認められるもので、東九州においても海岸部から山間部まで多くの遺跡が知られている。

この轟式土器と同様な特徴を持つ土器は、四国・中国地方においても出土しており、西南四国地域では「中津川式土器（第1類）」として周知され、前期における轟式土器の広い分布圏を窺うことができる。

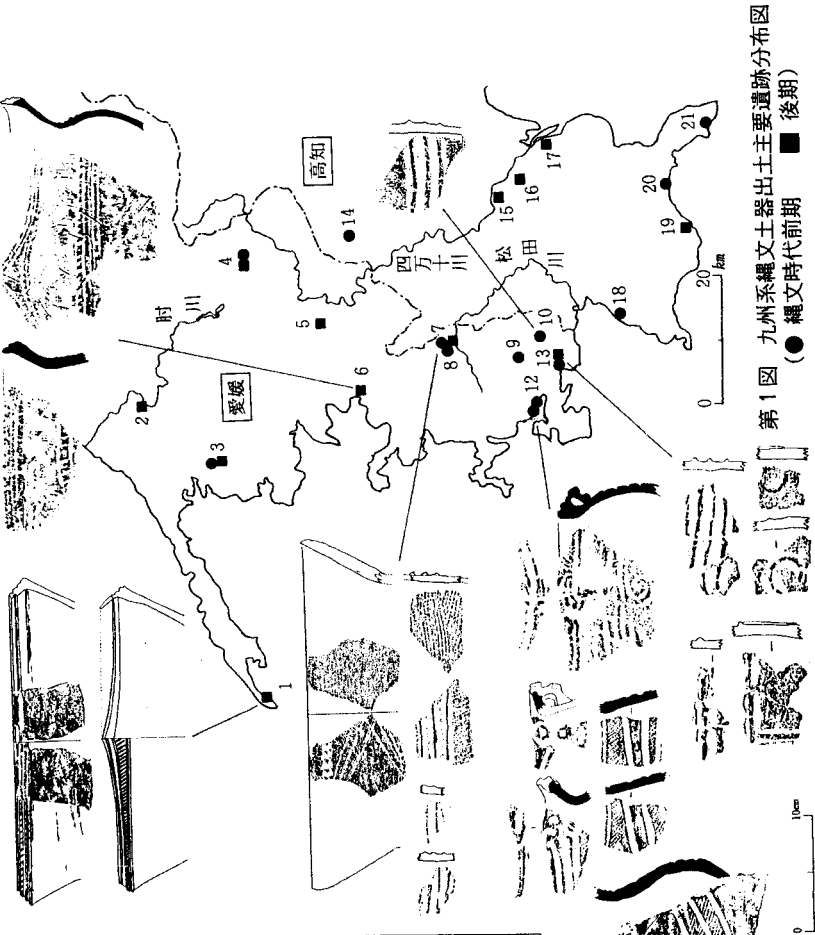
縄文時代前期の遺跡は、愛媛県内およそ25箇所が知られており、その内、西南四国地域では10箇所ほどの遺跡が認められ、先に挙げた早期の中津川洞・深泥・茶道・池の丘遺跡の他にも、津島町影平遺跡、城辺町梶郷駄馬遺跡、宇和町城楽岩陰遺跡などが存在している。なお、西南四国地域の前期の遺跡では、轟式土器の他に、貝殻条痕に刺突文が施された「羽島下層式土器」の影響も見られることから、東九州と瀬戸内の両地域の文化が波及していることになる。同様に羽島下層式土器は東九州地域の羽田遺跡・粉洞穴・横尾貝塚などでも出土している。

東九州地域と他地域との交流を考える上で貴重な資料を提供する姫島産黒曜石は、前期の時期に最も広い交流分布域を示し、轟式土器の広範な広がりとは無関係でないことは無論である。と同時に瀬戸内系土器のみが出土している遺跡においても姫島産黒曜石製の石器が発見されている。このことは土器の波及を媒介としながらも、それを越えた交流のあり方の一端を示唆するも



九州系縄文土器出土  
主要遺跡

- |     |    |
|-----|----|
| 1.  | 塚  |
| 2.  | 貝  |
| 3.  | 遺跡 |
| 4.  | 遺跡 |
| 5.  | 遺跡 |
| 6.  | 遺跡 |
| 7.  | 遺跡 |
| 8.  | 遺跡 |
| 9.  | 遺跡 |
| 10. | 遺跡 |
| 11. | 遺跡 |
| 12. | 遺跡 |
| 13. | 遺跡 |
| 14. | 遺跡 |
| 15. | 遺跡 |
| 16. | 遺跡 |
| 17. | 遺跡 |
| 18. | 遺跡 |
| 19. | 遺跡 |
| 20. | 遺跡 |
| 21. | 遺跡 |



第1図 九州系縄文土器出土主要遺跡分布図  
(● 縄文時代前期 ■ 後期)

のであろう。

このように縄文前期は、轟式土器や姫島産黒曜石を媒介として、西南四国地域と東九州地域との交流が盛んに行われた時期と見なすことができ、しかも海岸部のみでなく、内陸部にも及んでいるのである。

東九州地域の中期の時期は、縄文時代の各時期の中で遺跡数が最も少なく、大分県内で20数箇所が知られている程度である。これら中期の遺跡の内、特に前半の時期ではで地文に縄文を施し、その上に刺突文や突帯文を付けた瀬戸内系の「船元式土器」が発見されており、東九州地域が瀬戸内の同一文化圏に入っていたものと考えられる。これに対して後半の時期では、凹線文で特徴づけられる熊本県の阿高貝塚を標式とする「阿高式土器」およびその系統の、いわゆる九州の在地系土器が認められるのである。

一方、愛媛県内でも前期や後期に比較して、この時期の遺跡は十数箇所と少ないようで、西南四国地域では瀬戸内系の土器が見られる茶堂遺跡や深泥遺跡など数箇所が知られている程度である。また、縄文時代の各時期がほぼ認められる穴神洞や中津川洞の遺跡でも、不思議と中期のみが欠落しているのである。この中期の時期は西南四国地域と東九州地域との交流は、前後の時期と比較して極めて乏しいようである。

後期の時期は、西南四国・東九州地域はもちろん西日本一帯が東日本からの縄文文化の影響を大きく受けた時期で、後期初頭からの磨消縄文土器の波及がこのことを端的に物語っている。また、この時期は貝塚が発達しており、砂泥・岩礁性海岸での貝類の採捕や内湾・外洋性の漁撈活動が沿岸部において盛んに行われていたことが、容易に考えられる。

東九州地域では縄文時代の貝塚が16箇所程知られているが、その9割近くが後期に、しかも国東半島北部のつけねから中津にかけての周防灘沿岸と別府湾沿岸に集中している。

この時期の土器としては、後期初頭は阿高式土器系統のいわゆる九州の在地系の西和田式土器と中津式土器・福田KⅡ式土器など瀬戸内系の磨消縄文土器のが認められ、瀬戸内地域の影響が強く見られる。前葉から中葉にかけては、大分市小池原貝塚を標式遺跡とする小池原上層式土器で代表される九州で発達した磨消縄文土器が主体を占め、さらにその流れをくむ西平式土器・三万田式土器などへと発展する。

西南四国では、南宇和郡や西宇和郡などを主体に、30箇所近い数の遺跡が知られている。それらの遺跡における土器の要素には、中津式（六軒家Ⅰ式）・福田Ⅱ式（岩谷式・宿毛式）などで代表される瀬戸内系の磨消縄文土器群と、小池原式土器と極めて強い関連が見られる御荘町の平城貝塚を標式とする磨消縄文土器の平城式土器（平城Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）がみられる。さらに、西平式土器との関連が窺える宇和島市伊吹町遺跡をタイプサイトとする伊吹町式土器なども認められる。このように西南四国地域の後期初頭は東九州地域と同様に瀬戸内地域の影響が見られるのに対して、前葉から中葉にかけては、東九州地域や九州北部との強い関連が窺え、西南四国地域と東九州との交流の一つのピークが考えられる。

縄文時代後期に両者の交流が盛んに行われたことを示唆するものとして、前期の時期と同様に西南四国地域の後期遺跡の10数箇所では姫島産黒曜石が発見されており、なんらかの方法で各遺跡に持ち込まれているのである。

南宇和郡御荘町平城貝塚と大分市小池原貝塚は、後期前葉の時期での両地域の代表的な遺跡と目され、しかも貝塚が形成されている。この両者の遺跡を比較するとき、古くから注目されている土器の類似やその他の人工遺物の関連もさることながら、両貝塚から出土する自然遺物、特に貝類や魚骨などに共通する要素が多く、主要な生業の類似が指摘される。豊後水道・豊予海峡を同じように生活の場にしていた遺跡としては当然のことであろうが、それだけに漁撈活動を媒介にした、東九州と西南四国との人々の往来による直接的な交流が考えられる。また、このことはさらに飛躍させれば、縄文時代後期における「豊後水道・豊予海峡文化圏」設定の可能性を示唆するものであり、前期の時期にも同様な可能性が考えられよう。

晩期は縄文土器の上で西日本一帯ほぼ共通した文化圏が見られ、当然のように四国西南と東九州の両地域の共通性が見られるということになる。すなわち、この時期の土器は、基本的には浅鉢形と深鉢形の器形に二分され、文様では後期の時期に隆盛を誇った縄文が全く失われ、沈線などの単純な文様が巡らされているのみである。器面が丹念に磨かれた精製土器と条痕地の粗製土器が区別され、また晩期中頃以降後半の深鉢形土器には刻目突帯文が施される。

東九州の晩期の遺跡は185箇所ほどが知られているが、その約半数は大野

川上・中流域の火山灰台地に集中しており、これに対して周防灘から豊後水道沿岸地域は約20箇所と意外に少ない。

西南四国地域の晩期の遺跡数は少なく、6箇所ほどが知られるのみで、その内の穴神洞・中津川洞の両遺跡第I層、広見遺跡・茶道遺跡など4遺跡はそれ以前から永い系譜につながる遺跡である。

東九州での海岸部における遺跡が少ないことや、西南四国でも同様な状態であるということは、晩期の時期での漁撈活動の停滞と両地域の交流の乏しさの一面を示唆するものであろう。

### 3. 姫島産黒曜石の交流

東九州で唯一黒曜石を産する姫島は、国東半島北方、東国東郡国見町の伊美港東北6キロの周防灘に浮かぶ周囲約17キロの小さな島で、東西7キロ・南北4キロである。

火山活動の産物である黒曜石は、島の西北部、観音崎の先端部に東西120m・高さ40mの崖面に露出しており、一部は海中に没している一大黒曜石の産地である。また、黒曜石は露頭に隣接する東西の小さな砂浜にも円礫として多数存在する。これらは黒曜石の露頭が崩壊し、崖下で転礫化したものと考えられる。姫島では観音崎の他に、島の東北部の両瀬の海岸でも、肉眼的に同質でしかも蛍光X線分析法でも元素比組成のパターンが一致する黒曜石が円礫の状態で見られる。

姫島産黒曜石は一般の黒曜石と異なり、その色調が乳白色ないし灰白色を呈しており、一部にはやや黒色を帯びたものが存在する。これは露頭の上層部のものほど白色が顕著で、下層になるほど黒色が強くなるという産出地点の違いに起因するようである。

乳白色・灰白色という特徴的な色調を持つ姫島産黒曜石に類似した黒曜石として、長崎県針尾島産のものが知られている。黒曜石の蛍光X線分析ではその違いが容易に判断されるが、肉眼的にはこの両者の識別は困難である。このことは西北九州地域の遺跡で発見されている乳白色・灰白色の黒曜石の交流については、慎重を期さなければならないということになる。

黒曜石はガラス質のため打ち割ると貝殻状の割れ口をなすが、これは姫島産黒曜石も同様である。ただ、姫島産黒曜石は原石に白色をした節理が入る

ことが多いため、比較的大きな剥片を取ることが難しいようで、石鏃などの小形の剥片石器に多用される傾向が見られる。しかしながら、国東半島の東、姫島の東南約13キロに所在する縄文時代前期を主体にする羽田遺跡では、多量の石核と共に大形の剥片が剥離されている。

いずれにせよ、姫島産黒曜石は縄文時代の剥片石器の主要な材料として、周防灘・豊後水道から瀬戸内海西部にかけての地域で広く利用されている。

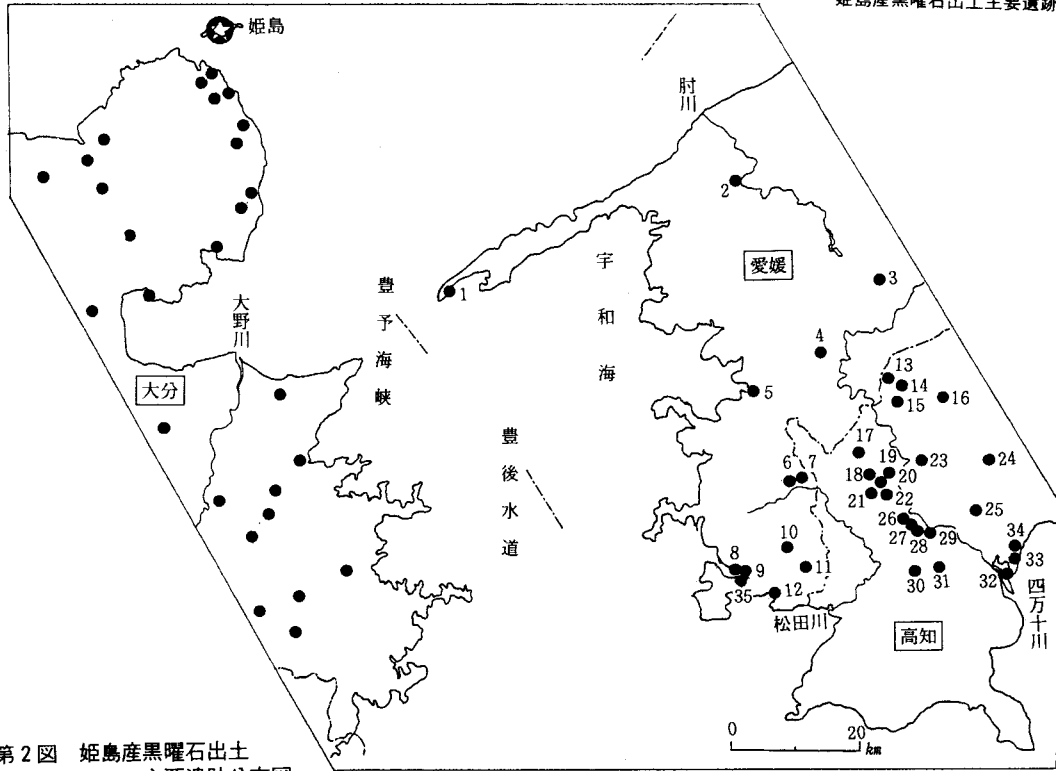
先史時代における姫島産黒曜石の交易などの問題については、隈昭志氏(1961年「石器材料の石質からみた需給圏」考古学研究7-1)、潮見浩氏(1980年「石器原材料としての姫島産黒曜石をめぐって」内海文化研究紀要8号)、木村剛朗氏(1985年他)など先学によって論じられている。そのため屋上屋を重ねる感があるが、主として石器製作過程の視点から姫島産黒曜石についての若干の問題点について触れてみたい。

姫島産黒曜石の使用時期は、後期旧石器時代にまでさかのぼるが、使用頻度は極めて低く、その分布も極めて限られている。東九州地域の剥片石器の石材は先に述べたように、大野川流域では無班晶流紋岩あるいはホルンフェルスの使用が一般的で、姫島産黒曜石は皆無の状態である。一方、玖珠・日田地域もやはり姫島産黒曜石の利用は認められない。このような状況の中で、姫島産黒曜石は大分川下流域や国東半島南部の別府湾周辺、それに宇佐平野などのそれぞれ地域で数箇所が知られている程度ある。結局、東九州においても旧石器時代における姫島産黒曜石の交流は、姫島と比較的近距離でしかも海岸から遠く離れてない地域に限定されるようで、西南四国地域の旧石器時代でも現在までのところ発見されていない。

縄文時代はその全期間を通じて、大分県下を主体に、宮崎・鹿児島などの南九州の一部、それに、熊本・福岡においても少数ながら知られている。一方、豊後水道を越えて愛媛・高知の両県、さらに周防灘を介して山口・広島・岡山など、瀬戸内海西部および中部にまで、その分布域を拡大している。

西南四国地域の縄文時代では、前期から後期にかけての海岸部近くあるいは川沿いの遺跡を中心に、10箇所ほどで姫島産黒曜石製の石鏃・剥片などが発見されている。具体的な遺跡として、南宇和郡御荘町節崎・同町深泥、一松町茶堂、津島町池の丘・同町影平、久枝、宇和島市伊吹町、城川町中津川洞、城辺町梶郷駄馬、三崎町野坂貝塚などが知られている。さらに高知県西

姫島産黒曜石出土主要遺跡



- |     |       |    |
|-----|-------|----|
| 1.  | 野坂    | 貝塚 |
| 2.  | 常森    | 遺跡 |
| 3.  | 中津川   | 遺跡 |
| 4.  | 岩谷    | 遺跡 |
| 5.  | 伊吹    | 遺跡 |
| 6.  | 影平    | 遺跡 |
| 7.  | 池の    | 遺跡 |
| 8.  | 深平    | 遺跡 |
| 9.  | 掘泥    | 遺跡 |
| 10. | 郷馬    | 遺跡 |
| 11. | 広見    | 遺跡 |
| 12. | 茶堂    | 遺跡 |
| 13. | 古城    | 遺跡 |
| 14. | 馬崎B地区 | 遺跡 |
| 15. | 広瀬    | 遺跡 |
| 16. | 奈瀬    | 遺跡 |
| 17. | 真土    | 遺跡 |
| 18. | 大小    | 遺跡 |
| 19. | 津賀    | 遺跡 |
| 20. | 沖西    | 遺跡 |
| 21. | 曾井    | 遺跡 |
| 22. | 堂ヶ市   | 遺跡 |
| 23. | 大用    | 遺跡 |
| 24. | 奈路    | 遺跡 |
| 25. | 勝間川   | 遺跡 |
| 26. | 勝間川   | 遺跡 |
| 27. | 勝間川   | 遺跡 |
| 28. | 鳥打場   | 遺跡 |
| 29. | 三見    | 遺跡 |
| 30. | 国保    | 遺跡 |
| 31. | 久保    | 遺跡 |
| 32. | 平野    | 遺跡 |
| 33. | 双海    | 遺跡 |
| 34. | 本馬    | 遺跡 |
| 35. | 節崎    | 遺跡 |

第2図 姫島産黒曜石出土  
主要遺跡分布図

南部の四万十川の流域でも、高岡郡影野地遺跡、幡多郡駄馬崎B地区遺跡・広瀬遺跡など20箇所を越える前期・後期の遺跡を主体に姫島産黒曜石の石器類が発見されている。

これらの遺跡の分布状況から、豊予海峡⇨宇和海⇨南予⇨高知県へと海沿いに、さらに河川沿いに内陸部へと言う交流のルートが推定される。

佐多岬の突端近くに位置する西宇和郡三崎町の野坂貝塚は、大石式土器に對比される土器が出土している晩期前葉の遺跡である。縄文時代の日常の生活を考えるにはあまりにもその立地条件が悪いと考えられる当遺跡から、姫島産の黒曜石、さらに佐賀県伊万里市の腰岳産黒曜石も発見されているのである。一番最初に触れた通り、佐多岬は東九州地域と最も接近した地点で、佐賀関とは僅か15キロで、しかもその間には高島が位置するという地理的な条件から、縄文時代を通じて黒曜石は無論のことあらゆるの交流の要所と考えられ、この野坂貝塚は中継基地的性格が窺えるのである。

西南四国地域において姫島産黒曜石の石器類が発見されているこれらの遺跡の大半では、石鏃を主体とした「製品」という形で姫島産黒曜石が認められており、それに若干の使用痕剥片・剥片と一緒に出土している。しかしながら姫島産黒曜石を用いての石器製作を積極的に示唆する痕跡が遺跡内で認められないのである。このような遺跡に対して、製品や剥片と共に原石・石核が出土している遺跡が、数は少ないが存在する事実は、姫島産黒曜石の交流のあり方を考える際に重要である。

御荘町節崎遺跡では約1200gの姫島産黒曜石の原石1点が、縄文前期の轟式土器などと採集されている。さらに同町深泥遺跡では縄文早期から中期にかけての九州系土器・瀬戸内系土器と共に、670gの石核1点、人頭大の円礫2点が採集されている。外に多量の石鏃も発見されている。また、隣接する一松町茶堂遺跡は瀬戸内系の縄文中期の土器などが出土する遺跡として知られているが、ここでも多量の剥片、しかも一部には自然面を持つ剥片と一緒に500gの原石が出土している。さらに高知県西南の双海遺跡でも、剥片・石核それに石鏃などが発見されているという。

節崎・深泥の両遺跡は、共に御荘湾の最も奥まった海岸近くに立地しており、茶堂遺跡もこの湾に注ぐ僧都川の河口から数kmの川沿いに立地している。これらの遺跡における原石・石核の存在と沿岸や河口近くという遺跡の立地

は、姫島産黒曜石の交流を考察する上での一つの要素とされよう。このように西南四国において姫島産黒曜石が発見される遺跡では、石鏃などの製品が主に発見される大半の遺跡と、原石・石核、剥片、それに製品が発見される少数の遺跡が存在するのである。西南四国諸遺跡における姫島産黒曜石利用のこのあり方は、縄文時代の石材と石器製作を含めた交流の様相を示唆するものと考えられる。具体的には石器製作での原石地・原産地での石材の選択、原石採掘・採取から細部調整・整形による石器としての製品の完成までの作業プロセスが、いずれの場所で、どのように行われたかが問題とされよう。

石器製作の基本的な作業プロセスとして、まず原石地ないしは隣接する場所で石器製作に関わるすべての作業が行われ、完成された製品のみが他の場所（遺跡）に持ち出される（持ち込まれる）場合。次に素材としての剥片、すなわち半製品の段階まで準備され、その後は各遺跡で行われる。そして最後に、原石地では原石の採掘・採取ないしは原石・母岩の自然面の打ち割りや適当な大きさに整えて石核に近い状態にして、後の作業は各遺跡内で行われる場合である。

現時点では姫島の島内においては、縄文時代晩期の時期の用作遺跡のみで、それをさかのぼる古い時期の遺跡は皆無である。姫島産黒曜石の交流が盛んに行われていたと考えられる前期や後期の時期の遺跡が発見されていないことは、島内では原石の採掘・採取が主に行われことを示唆するものである。先に挙げた西南四国地域の幾つかの遺跡で、姫島産黒曜石の原石や石核が発見されているは、原石ないしそれに近い状態で遺跡に持ち込まれたことを裏付けるものと考えられる。

この場合の原石の獲得・入手方法として、各遺跡の人々が原石地で直接採取したのか、あるいは姫島に隣接する周辺地域の人々との交易によるものかと言う、石材の交流を考える上での基本的な大きな問題が残される。また、先にも述べたように、姫島産の黒曜石製石器の出土している大半の遺跡では、石鏃としての製品が発見され、当該遺跡での姫島産黒曜石を用いての積極的な製作の痕跡が認められない。このことは先の原石あるいは石核の入手とは対照的なケースであり、製品が作られた場所を何処かに求めなければならないことになる。

そこで、姫島で石器製作に関連する晩期以前の該当遺跡が無ければ、姫島



に近接する周防灘・伊予灘沿岸での遺跡の存在に目を向けなければならないことになる。すなわち、原石地に隣接する地域で、原石や石器製作の作業段階を示す石器類が出土する遺跡の有無が問題とされる。

これについては東国東郡国東町の羽田遺跡の存在が注目される。この遺跡は姫島の東南約13kmの国東半島の東側、すなわち伊予灘に面した現海岸から約500m内部の幅約30m、長さ約130m古砂丘上に立地している。ほ場整備事業の事前調査として1987年、国東町教育委員会が発掘調査を実施している。

縄文時代前期の轟式土器（B式）を主体に、条痕文土器・無文土器、それに東九州の前期に普遍的な轟式と、九州の西側地域に主体的な分布域を持つ曾畑式、それに瀬戸内系の羽島下層式土器などが出土している。これらの土器型式から前期の時期における盛んな交流の様相を知ることができる。このほか数は少ないが、縄文時代後期の西和田式・中津式・北久根山式・西平式土器などが出土している。

問題の姫島産黒曜石製の石器類については、剥片4666点、石核および原石288点、剥片石器は石鏃69点・搔器27点・柳葉形石器21点・石錐21点・尖頭状石器19点などが出土している。大半が前期の時期と考えられる各石器の数量は、一遺跡内での消費の数を上回る多さと言えよう。ほかには石匙・石錘・石斧・たたき石・凹石・磨石・石皿などが少数出土している。

この遺跡で特に注目されるのは、姫島産黒曜石製の剥片・石核および原石の多さである。その石核・原石の大きさは10～12.5g、30g前後、50g以上、さらに1kg以上や10kg前後の大形のものが見られ、しかも大形石核の集積場（デポ）の存在である。デポは4箇所確認されており、原石の荒割りから、石核・剥片の製作、さらに先に挙げた各種の石器まで一連の石器製作が行われており、まさに姫島産黒曜石を用いた石器の生産遺跡と判断されるものである。

羽田遺跡は姫島に近接する海岸に立地していることや、姫島産黒曜石製の石器、原石・石核、剥片などが多量に出土していること、さらに石器製作の一連の作業過程が認められることなどから、他の遺跡への供給を目的とした石器生産の専業集団の姿が想定される。このことは、姫島産黒曜石の石器類が、素材としての剥片の段階や製品としての石器の段階で、あるいは石核や原石のままで、専業集団による交易によって、他地域へ広くもたらされたこ

とを物語るものであろう。仮に石器製作の専門集団が存在するとなれば、当然何らかの形で姫島の黒曜石原石地の管理にも関与していた考えなくてはならないだろう。

結局、姫島産黒曜石の交流については、組織的な石材獲得から石器製作、さらに供給までの一環した「生産と流通」という視点から考えなくてはならないということであろう。羽田遺跡の他にも石器製作の専門集団を示唆する遺跡が姫島周辺地域に存在していたものと思われる。

実際、東国東郡武蔵町に所在する熊尾遺跡は、弥生時代中期の時期であるが、正にそのような遺跡である。この遺跡は姫島から西南約25キロの海岸に突き出た舌状丘陵の先端に立地しており、50g以下の小型石核221点を始めとして、製品・剥片・碎片が多量に出土し、姫島産黒曜石製の石器製作と製品の供給を専門した遺跡と判断される。

羽田遺跡や熊尾遺跡のような石器製作の専門的な遺跡の条件としては、島に原石が存在することから、舟を持ちしかも重い原石を積んで自由に操れることが前提条件で、さらに、これに関連することとして、姫島に近いことや重量のある原石を運ぶための舟の出入りが容易なために、海岸や河口に隣接していることが必要とされよう。

先に述べた西南四国地域で、石核が発見されている節崎・深泥の両遺跡は御荘湾の最も奥まった海岸に立地しており、また茶堂遺跡は河口から数キロに位置しており、姫島産黒曜石の中継的基地的条件を備えていると言えよう。また、三崎町の野坂貝塚の地理的立地はさらに条件が整ったものと思える。

縄文時代における姫島産黒曜石の交流が、各遺跡の人々による姫島での直接的な採取によるものと、姫島に近接する地域の石器製作の専門的な集団によるものとの、二つの方法が考えられるわけである。ただ、羽田遺跡や熊尾遺跡のような内容を持つ遺跡の存在から、石器製作とその供給を目的とする専門集団の存在と原石地の管理が予想され、遺跡ごとの直接的な原石採取についても、全くの自由と言うことではなく、なんらかの交易的な要素が内在していたとすべきであろう。原石と石器生産の専門的集団の存在を可能ならしめるためには、組織的な消費地と流通のルートが確保され、また見返りとしてのなんらかの交易品を考えなくてはならないことになる。

## お わ り に

東九州地域と西南四国地域との交流については、縄文時代前期の甕式土器が広範な分布を示すことや、中期の瀬戸内系文化の船元式土器が東九州地域に強く認められること、さらに後期では磨消縄文の小池原上層式土器・平城式土器が両地域で展開していることなどに、認めることができる。

豊予海峡・豊後水道を挟んだ両地域の関連性については、海を媒介とした生活領域における縄文時代の生活全般での集団の動態など、多角的な視点が必要とされよう。そしてこのような東九州地域と西南四国地域との交流に姫島産黒曜石を媒介とした集団の存在が、大きく貢献していたものと推測されるのである。今後、各遺跡における姫島産黒曜石の在り方、例えば先に述べた石器製作パターンのどれに該当するかなど、製品としての石器のみでなく、剥片や碎片に至るまでの検討が必要とされ、また、中継基地的遺跡の在り方にも目を向けなければならないだろう。さらに、姫島周辺の海岸部遺跡と内陸部・山間部との生産活動の主体が異なる遺跡間の交流も、姫島産黒曜石の生産と流通に当然深く関わってくるものと考えられる。

## 主要参考文献

- 犬飼徹夫 (1982) 「狩猟・漁撈の生活と文化」『愛媛県史 原始・古代Ⅰ』
- 犬飼徹夫 (1985) 「縄文時代」『愛媛県史 資料編考古』
- 江坂輝弥他 (1967) 「愛媛県上黒岩岩陰」『日本の洞穴遺跡』日本考古学協会洞穴調査委員会
- 木村剛朗 (1985) 「姫島産黒曜石よりみた西日本縄文期の交易圏と土器文化圏」『考古学ジャーナル』244
- 木村剛朗 (1987) 『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研
- 木村剛朗 (1970) 「九州姫島産黒曜石よりみたる西四国縄文期の交易圏」『土佐史談』124～126号
- 坂田邦洋 (1972) 「成仏岩陰遺跡の調査」国東町教育委員会
- 坂田邦洋 (1983) 「九州産黒曜石からみた先史時代の交易について(一)」『賀川光夫先生還暦記念論集』
- 坂本嘉弘 (1983) 「縄文時代の発展」『大分県史 先史編Ⅰ』
- 坂本嘉弘 (1991) 「姫島用作遺跡」『姫島村文化財調査報告書』第1集
- 清水宗昭 (1982) 「姫島産の黒曜石とガラス質安山岩の分布について」『賀川光夫先生還暦記念論集』
- 大正正風 (1978) 「中津川洞第Ⅲ次発掘調査概報」城川町教育委員会
- 橋 昌信 (1979) 「九州地方の細石器文化」『駿台史学』47
- 橋 昌信 (1983) 「大分の旧石器時代遺跡—大野川上・中流域—」『大分県史 先史編Ⅰ』
- 橋 昌信編 (1991) 「池の岡遺跡試掘調査報告書」津島町教育委員会
- 橋 昌信編 (1992) 「影平遺跡試掘調査報告書」津島町教育委員会
- 長井数秋 (1988) 「北四国地方の縄文土器集成(Ⅱ)—前期縄文土器—」『愛媛考古学』10

- 長井数秋 (1989)「北四国地方の縄文土器集成(Ⅲ)－中期縄文土器を中心として－」『愛媛考古学』10
- 長井数秋 (1991)『伊予国佐多岬半島の先史文化』
- 日本第四紀学会 (1987)「日本第四紀地図」
- 正陸睦夫・十亀幸雄 (1985)「日本の古代遺跡 愛媛」保育社
- 真野和夫・牧尾義則 (1984)「下城式土器文化の研究1－武蔵町熊尾遺跡における土器および石器の検討」『研究紀要』1 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館
- 宮内克己・牧尾義則 (1990)「羽田遺跡(Ⅰ地区)」『大分県国東町文化財調査報告書』第6集
- 山口将仁 (1990)「高知県における後期旧石器時代の様相」『旧石器考古学』41
- 吉留秀敏 (1983)「大分の旧石器時代遺跡－筑後川上流域－」『大分県史 先史編Ⅰ』
- 和口遺跡調査団 (1989)「愛媛県御荘町和口遺跡第4地点試掘調査概要」
- 藁科哲男・中越利夫 (1985)「大分県姫島黒曜石産出地」『探訪縄文の遺跡 西日本編』
- 藁科哲男・東村武信 (1985)「西日本地域の黒曜石研究」『考古学ジャーナル』244



羽田遺跡の石核と敲石出土状況

姫島観音崎の黒曜石露头



羽田遺跡の石核と敲石出土状況